平新報

發行日　毎月二回五日、二十日發行
編輯兼發行印刷人　福島縣平町二丁目拾　山野邊庄吉
發行所　平新報社
廣告料　五號十二字詰一行　一回五十錢　協所指定倍增
一部　定價金拾錢　送料　五厘

磐中校創立三十九年の紀念日に當り

若葉薫る高月臺上に運動會と展覽會

開校三十九週年を迎へた平町高月臺、縣立磐城中學校では恒例により開校紀念日たる本五月五日第三十六回陸上大運動會を若葉薫る高月臺の同校庭にて開催される「但し雨天順延」右の運動會中各小學校八百リレー優勝旗は一昨年迄平第一小學校が三年間勝ち續けしため同校にて獲得したれば昨年新調の優勝旗の爭覇戰が行はれる事になつてゐる。尚ほ當日は同校舍内にて第四十一回美術部X會展覽會併せて本郡内小學校兒童圖畫成績品展覽會が開催されるが同校の沿革概要左の如くである。

磐中校の沿革

同校は明治二十八年十月三十日福島縣尋常中學校磐城分校として舊菊田磐前、石城全町村組合から設立願があつて同年十一月十六日認可になり二十九年四月五日に開校同五月五日縣吏員等の臨席の下に開校式が催されたといふ。

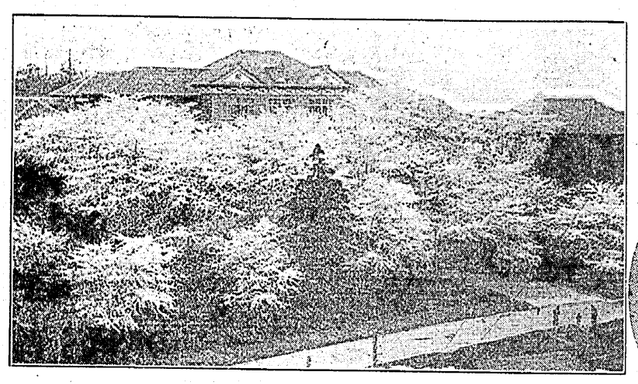
故に同校の開校紀念日はこの五月五日となつてゐる……次いで三十一年四月一日分校を更めて第二尋常中學校となり、三十二年四月尋常の二字とをとり三十四年四月福島縣磐城中學校と、引いて同年同月二十七日現在の「立」となつたのである。

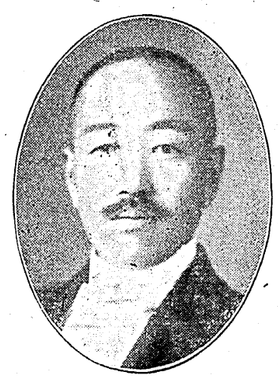
校舍敷地は平町揚土臺に大正十二年三月三十一日迄で同年四月一日より現在の高月臺に移つたのである。

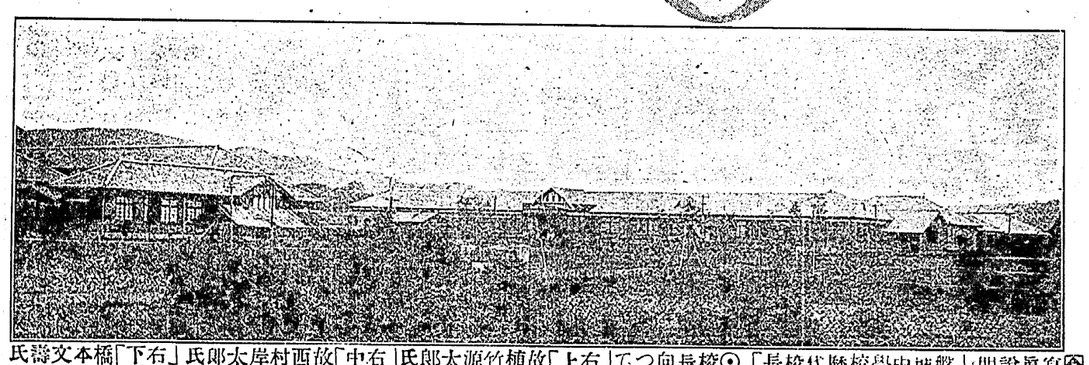
生徒の數を見るに明治二十九年開校當時に百十六人の入學を許し三十四年卒業生第一回四十三名を出した。三十四年四月在校生總數四百五十二人四十五年四月一日には五百二十一人、大正十一年四月一日には八百七十八十五年四月一日一千五十四人の二十二學級職員數三十五人昭和三年四月は一千百十二名の二十四學級職員數四十一名（うち配屬將校を合せて）生徒數一千三十八名學級數二十五學級昭和五年は生徒數一千五十八名學級二十五學級職員數四十二名昭和六年は生徒數一千百七十五名學級數二十五職員四十四外に配屬將校一、七年は生徒數千百十一職員四十三、昨年四月二十日現在生徒數一千百九十、本年五月現在生徒數一千百三十六、職員四十七名かくの如く校舍と申し設備と申し東北切つての最大中學校と稱されて居る其間の歴代校長は

◈故植竹源太郎氏開校當時より明治四十四年三月迄
◈西村岸太郎氏大正三年九月迄
◈故桐谷文平氏大正十年三月迄
◈滑川一郎氏大正十五年十二月十二日迄
◈山崎光雄氏、滑川氏現職のまゝ死亡により大正十五年十二月十三日より昭和二年三月十九日迄校長事務取扱
◈唐土齊治氏昭和二年三月廿日田村中學校長より轉任昭和五年六月十六日奈良縣郡山中學校長に轉任
◈山崎光雄氏校長事務取扱同年六月二十日より
◈橋本文壽氏昭和五年八月三十日長崎縣視學官より着任昭和八年三月三十一日高田師範學校長に轉任
◈小檜山久作氏昭和八年四月一日會津中學校長より着任今日に至る

（小檜山久作氏）







⊙磐中校舍（上）思出多き平揚土臺の元校舍（下）輪奐たる美觀を呈する平高月臺上の現校舍

◈寫眞説明「磐城中學校歴代校長」⊙「長校代歴校長向つて「上右」「中右」「下右」故植竹源太郎氏故西村岸太郎氏
「中」故桐谷文平氏「左」故滑川一郎氏「上左」唐土齊治氏「下左」

小檜山磐中校長

全國校長會に出席

磐中校長小檜山久作氏は五月十七日から同二十一日迄東京府立第一中學校に開かるゝ全國中學校長會に出席の筈。

磐中校職員と學科受持

磐中校現職員氏名と各學科受持を開くに左の如くである。

氏名	學科受持
小檜山久作	修身
齋藤榮一	修身、歴史
梶原富次	數學
山崎宣吉	國語、漢文
梅森榮	物理、化學
廣田德行	歴史、地理
近藤廣記	圖畫、工作
仝	修身、英語、柔道、
橋本芳太郎	受持學科
配屬將校	
大井川八郎	修身
菅野貞雄	修身、公民
高清水勇助	數學
大橋秀冬	國語、漢文
豐口欣哉	物理、化學
廣木富之助	歴史、地理
渡邊恒夫	圖畫、工作
下山田直方	修身、習字
山名隆貞	國語、漢文
山本三郎	數學、物理
根本源壽	體操
大村隆	國語、漢文
吉田泰雄	英語
中島茂	博物
谷澤寅夫	化學
小林勝人	英語
下平熙	國語、漢文
樋口金太郎	數學
中柴光泰	國語、漢文
藤貞輔	英語
新谷榮	國語、漢文
沖原信行	體操
柴田美登	數學、教練
野口新藏	公民、實業
大淵彌次郎	英語
石田謙藏	教練、劍道
吉田秀文	國語、漢文
谷澤武夫	英語
舘野癸三郎	教練、劍道
庄司政之	國語、漢文
佐藤德四郎	教練、劍道
遠藤博	武藤貞輔
青天目源一郎	柔道
松本忠人	會計、書記
紺野勝治	庶務、書記
酒井國三郎	校醫
原精一	仝
大井川八郎	配屬將校

磐中校職員移動

◈鈴木寅之亟氏

磐中校數學科受持たりし氏は今回志を樹て仙臺東北帝國大學地質學部に入學のため退職せりと。

因みに氏は大正十五年三月三十一日から昭和九年四月二十五日に至る八ヶ年一ヶ月間同校に在職。

◈根本邦雄氏

磐中校音樂科受持の氏は三月三十一日附北海道廳立網走高等女學校及び中學校に轉した。

樋口後任は平第一小學校訓導武藤貞輔氏兼務である。

現存會友三千

磐中同窓會代々の役員

磐城中學校の沿革と現在の概要は別記載の如くであるが其校卒業生を以つてなる同窓會の模樣を見るに本年三月第三十四回迄の卒業生總人員三千四百三十八名のうち死亡會員約三百名にして三千百名の會員があつて毎年八月十日午後一時より同校に於て例會終了後懇親會を催し、母校及び會員に事件出來や其他にはそれ〴〵適宜の處置をなし、新年宴は一月三日夜開催相互の親睦を計つて居る、現在役員の任期は二ヶ年であるが今代々の役員を調ぶるに左の如くである。

●第一回（明治卅四年八月）
會長金古久次、幹事森田一郎（在校五年生）

●第二回（三十五年）
會長四條七十郎、幹事花澤甫戛、波多野通理

●第三回（三十六年）
會長比佐昌平、副會長加藤木保次、幹事渡邊庄五郎、山崎宣吉

●第四回（三十七年）
會長栗原一郎、副會長山下慥爾、幹事夏井要次郎鈴木芳之助

●第五回（三十八年）
會長堀尾成章、副會長松本政勝、幹事山部正勇、西村東太

●第六回（三十九年）
會長八木澤文吾、副會長北郷博、幹事佐藤順平、（改姓草野）新田目春松

●第七回（四十年）
會長吉田哲五郎、副會長高萩桂次郎、幹事松崎林八、阿部政右衛門、三瓶信一、比佐義男

●第八回（四十一年）
會長山崎宣吉、副會長清水廣政、幹事加藤丈夫、諸橋嘉吉、梅原幸助

●第九回（四十二年）
會長廣田德行、副會長新田目春松、幹事白井一郎小齋良、高萩實

●第十回（四十三年）
會長山崎清三、副會長新田目春松、幹事渡邊保皓久野二郎、安島久

●第十一回（四十四年）
會長山崎清三、副會長新田目春松、幹事渡邊保皓新宮健雄、柴田德二

●第十二回（大正二年八月）
會長山崎清三、副會長新田目春松、幹事山崎宣吉松崎憲司、柴田德二

これより任期を二ヶ年とした

●第十三回（四年八月）
會長加藤丈夫、副會長阿部政右衛門、幹事濱島操山崎宣吉、佐藤寅吉

●第十四回（六年八月）
會長山崎清三、副會長新田目春松、幹事柴田德二長瀬齋一、佐藤寅吉

●第十五回（八年八月）
會長新田目春松、副會長柴田德二、幹事長瀬齋一根本毅一、石川友次郎

●十年再選

●十二年
會長新田目春松、副會長井上貞治郎、幹事根本毅一、石川友次郎、酒井清永山勇吉、藤田榮助

同時に評議員を設け山崎清三、清水廣政、草野順平、阿部政右衛門、加藤丈夫その後引いて毎年開會せるも集會員尠く選擧をなさず

◆大正十五年八月改選
會長白井一郎、副會長は二名として仲里文平、三森虎雄、幹事遠藤俊一郎關内正一、諸橋元三郎、青天目增藏、木村守江選ばれ庶務關内正一、會計は諸橋元三郎

●昭和三年八月十日改選の結果
副會長二名の所一名とし幹事五名の所三名增加し八名會長諸橋守次、副會長酒井清、常任幹事關内正一山田盤麿、山野邊庄吉、幹事松本榮一、小野信一郎、蛭田利光、阿部傳六鈴木信雄

●昭和五年八月十日改選
會長諸橋久太郎、副會長酒井清、常任幹事關内正一、山田盤麿、山野邊庄吉、幹事松本榮一、松井深、野崎喜八郎、蛭田利光、阿部傳六

●昭和七年八月十日改選
會長關内正一、副會長諸橋元三郎、常任幹事山田盤麿、山野邊庄吉、幹事松本榮一、野崎喜八郎、上田耕作、木村守江、山崎忠兵衛

尙評議員は從前通の山崎清三、清水廣政、加藤丈夫、阿部政右衛門、山崎宣吉、廣田德行、新田目春松の七名に新しく推薦された諸橋久太郎、酒井清、井上貞治郎、柴田德二、吉田金作の五名合せて拾二名である。

因みに昭和七年八月十日の會長關内正一、副會長諸橋元三郎、常任幹事山田盤麿、山野邊庄吉、幹事松本榮一、野崎喜八郎、母校に席を設きし人々は本人の申込みと希望により準會員として遇する事になつて居る事は、當時報導の通りである。

（會長　關内正一氏）

優良桑園仕立の秘訣（二）

先づ桑苗木買入虎の卷から

福島縣石城郡養蚕奬勵會長蚕業技手　木田藤次郎

然らば如何なる方法と如何なる見方とを必要とするかと云へますれば、現今の一般的當業者の鑑別方法は、其苗固有の特性を帶びあるものを以て良苗とするとの決定なら異存は無いが、左樣でなく、只單に其苗の丈けの長いものや、價格の低廉なるものを以て良い苗木であると斷定し、反對に丈が短かく價格も割合に高いと此苗木は、直ちに惡い苗木だと一ト口に言つてしまひますが、斯樣な苗木の鑑別法では決して良苗を鑑別したと云ふ事を得られません、依つて左に其の鑑別方法の骨を申し上げますと、

第一、其苗木全体の本數に就て其品種の固有の特徴を帶びある哉否を調べる事。

大葉なら大葉としての特徴を具備しあるや否見別けする事。

第二、病虫害のないもの左の如きものは不良苗と致します。

イ、カイガラ虫附着（枝につく）
ロ、腺（セン）虫（同）
ハ、胴枯病（同）
ニ、ヒメコシンクヱ（同）
ホ、紫紋羽病（根につく）
ヘ、白紋羽病（同）

以上の樣なものは不良苗でありますから良く根や枝を調べて注意する事が肝要であります。

第三、枝、幹、の過大、過小に失せぬもの

枝幹は筍苗と云ふ如く枝條の基部より上部の末梢に行くにつれ筍の成長した樣に自然に均行を保ちて過大、過小にならないもので、其太サの差が大なる程良い。

第四、根の形体變側なく繁茂良しきもの、苗木は枝買つたり枝を栽植するものにあらず、根を第一の條件として植付けもるのでありますから充分此の根の繁茂狀態及び正形變側なきものを良しとします。鷄足根と云つて丁度鷄の足の樣に一方にのみ變側成長したるものは良苗と云ふ事を得られません、依つて四方に均長したるものにして手の握り拳が四方に開らひたときの樣に均長したるものたる事であります。

第五育苗中摘葉せぬもの

育苗中苗圃に於て不良苗生産者となると摘葉して自分の家の蠶兒を飼育し相當の收入を得て二年目の桑苗で御座ると云つて平氣で眞面目な育蚕家へ賣り附けるが、こんな桑苗を買つた方は即ち不良桑苗を買つた方の仲間入をせねばなりません。

苗木のとき桑の葉を摘んだものは其部分の節と節との距離が短小となり、葉の附いて居た葉柄の所のアトが淺く成つて居るから良く判ります。

自然に落葉したものは、其痕が深く成つて居るから是又判ります、それから枝の一番上の方、即ち梢の附近を右手を以つて字を書く時の筆の樣に持つて親指にウント力を入れて折つて見ますと、葉を摘んだ苗木は枝條が良く充實して居りませんから直ぐグニャリと抵抗力とぼしく折れてしまいますから之れも外觀的に注意して鑑る一方法であります。

以上の如き方法を以つて苗木の鑑別を了し、優良ものを購入の上よい桑園を仕立ましてよい桑葉を蠶兒に給食せしめ、豊蠶多收の實績を擧げられん事を希望致します。

湯本郵便局長　鯨岡潔
湯本溫泉旅館料理組合
磐崎村（白鳥）元湯きらくや
磐崎村　中の湯春木屋
小田炭礦隅田川礦業所　好間村　小田吉治
内郷村會議員　山崎佐市郎
高野礦泉中の湯（綴驛ヨリ乘合の便アリ）
高級銘酒　湯本町　花春四ツ谷酒店
平町二丁目　谷口樓
平町二丁目　電話六八五　三井タクシー
高野礦泉入の湯（元關先迄自動車の便あり）
平町四丁目　伊勢屋商店
平町鍛冶町　渡邊整骨療院
平町鎌田町　草野七五三之助
小瀧鑛泉　玉川村　渡邊渡

聞新の朝鮮

最近磐中より 上級校入學者

四月三十日迄判明の分

○印は本年卒業生

入學校名	卒業回數	氏名
陸軍士官學校	五年	關內 三郎
高等師範學校	三三	箱崎 遠平
仝	三二	片寄 正道
仝	〃	木內 左門
盛岡高等農林學校	三三	赤津 千町
福島師範二部	五年	水野 良雄
仝	三三	大平 幸男
仝	〃	石川 喜義
仝	〃	赤津 千町
仝	〃	米本 恒久
仝	〃	松崎 一美
哈爾賓學院（縣派遣生）	五年	比佐 三郎
青山師範二部	三三	海老根英夫
中央氣象臺測候技術官	三三	木村財次郎
仝	○三四	平澤 健造
高等師範學校	三二	阿部 恒雄
遞信講習生	○三四	飛田 正幸
東京高等齒科醫學校	三三	國府田元良
仝	〃	伊藤 一人
名古屋高等商業學校	○三四	中津 秀幸
横濱高等工業學校	○三四	高萩 實
東京外國語學校	三一	堀 清
仝	○三四	鈴木 正夫
水戸高等學校	○三四	佐川 正
仝	三三	木田 茂
東京高等蠶絲學校	二九	樋口 久隆
仝	三三	竹本 邦明
松本高等學校	三二	下山田佐久彌
仝	三一	河村 雅雄
仝	○三四	渡邊 敏男
第二高等學校	三三	小川 政良
仝	〃	石井 定三
東京商科大學豫科	○三四	長久保 誠
仙臺高等工業學校	三三	鈴木 忠
仝	三二	星 憲司
仙臺高等工業學校	三二	伊藤 仁
仝	〃	渡邊 行雄
新潟高等學校	〃	小松 周三
松江高等學校	○三四	猪狩 常彦
濱松高等工業學校	〃	鈴木 繁好
第一高等學校	〃	田中 謙二
東京商科大學專門部	三三	增尾 善則
三重高等農業學校	三〇	中野 五郎
京都高等工藝學校	三三	水野谷勝雄
米澤高等工業學校	〃	鈴木 忠
秋田鑛山專門學校	○三四	桐谷 義男
東京美術學校	三三	村山 正吉
日本大學醫學部	〃	草野 光雄
東京齒科醫學專門學校	〃	吉田 遠平
岩手醫學專門學校	○三四	諸橋 一郎
仝	三〇	渡邊 毅
日本大學高等工學校	○三四	高野 萬亀
慶應義塾大學高等部	〃	渡邊 三良
日本大學豫科	〃	中島 重雄
東京齒科醫學專門學校	三三	野木 洋助
山形高等學校	○三四	高萩 浩
横濱專門學校	三三	大越 重義
青山師範二部	三二	齋藤 文男
國學院大學豫科	三三	山名 隆之
早大專門部商科	○三四	杉浦 敬三
昭和鐵道學校	〃	鈴木 勝
早稻田高等學院	三二	小林 忠司
小樽高等商業學校	三三	野口 一磨
福島高商	○三四	金成金一郎
早稻田大學	〃	中村 正夫
仝	三二	松原 政一

音信交換

博士の鑑定と予の迷信

或る日角田某氏に逢ふやりと迷信しあるを憐れみま某博士の敎ひを乞ふも、敎して老へ先の短き身なるにひなきに不思儀にも神示の此の判定の由を諭したなら敎訓により推知し得たる旨嘸ぞ落膽するであらう、夫を告くるや同氏の言に博士れよりは寧ろ云はず語らぬの鑑定には、千年前には海であつて其の當時權胴鯨が埋もれて化石と成りしものであると、然るに予が亀なの一は頽れて頭なき亀甲二体を恵贈しそれによりて判定せよとのことならん、神は我れ等を棄て給はず、大平洋より一は頽れさるもの士もなきにしもあらん、神示によれば大學の德に入るの門未だ遠きにあれば此の近き神鏡二体により照合せば我が身を見るが如く六せし由、此の由を聞いて始鑑の化石なることを証するめてその事實を了解する事を得ました、茲に於て予のし天地之れ師なり事物之れ無學無知文盲なる迷信の情を述んに、魚と鑑亀とは性質を異にし魚には頭骨と脊骨との連續するあり、亀には甲ありて脊椎骨なきは云ふ迄もなきことならんも、池掘り作業の當時頭と胸部と尾骨のみの採掘にして甲の部分に腐蝕せる薄紫色なる土色の變色に過ぎざるは人體に於ける皮膚に均しき結果ならん、魚とすれば脊髓骨の連續化石すること理の當然なるに然らずして斯る現場にありし化石の御査定に權胴鯨なりと、此の頭をして鯨なりと見る得るとしても胸尾の化石に至りては、予が七十有餘年の間に於てせみ、や、まつこう、ごんどう等數頭の實物の見分に徵し思ひ見るも倒底雲泥の差ありて承認すること思ひに任せず、殊に沿海に漁る人や見分の諸氏にありても現場の事實や實物を實見比較を成さいましたなら頭にのみ重きを置き胸尾を輕視せるが如き事實轉倒の戯辨ならんと一笑に附し去るの士もなきにしもあらん、神は我れ等を棄て給はず、大平洋より一は頽れさるもの一は頽れて頭なき亀甲二体を恵贈しそれによりて判定せよとのことならん、神示によれば大學の德に入るの門未だ遠きにあれば此の近き神鏡二体により照合せば我が身を見るが如く六

とはこの謂ひならん、某博士の御鑑定に是非の言を述めてその事實を了解する事に足る、神秘的本能を發揮を得ました、茲に於て予のし天地之れ師なり事物之れ無學無知文盲なる迷信の情師なる淵原の敎訓を明確にを述んに、魚と鑑亀とは性愈し給ひる神の敎ひに感謝質を異にし魚には頭骨と脊骨との連續するあり、亀には甲ありて脊椎骨なきは云ふ迄もなきことならんも、池掘り作業の當時頭と胸部と尾骨のみの採掘にして甲の部分に腐蝕せる薄紫色なる土色の變色に過ぎざるは人體に於ける皮膚に均しき結果ならん、魚とすれば脊髓骨の連續化石すること理の當然なるに然らずして斯る現場にありし化石の御査定に權胴鯨なりと、此の頭をして鯨なりと見る得るとしても胸尾の化石に至りては、予が七十有餘年の間に於てせみ、や、まつこう、ごんどう等數頭の實物の見分に徵し思ひ見るも倒底雲泥の差ありて承認すること思ひに任せず、殊に沿海に漁る人や見分の諸氏にありても現場の事實や實物を實見比較を成さいましたなら頭にのみ重きを置き胸尾を輕視せるが如き事實轉倒の戯辨ならんと一笑に附し去るの士もなきにしもあらん、神は我れ等を棄て給はず、大平洋より一は頽れさるもの一は頽れて頭なき亀甲二体を恵贈しそれによりて判定せよとのことならん、神示によれば大學の德に入るの門未だ遠きにあれば此の近き神鏡二体により照合せば我が身を見るが如く六

姿を見るが如く、今や物質文明最高の進展につれ入學試驗の袖の下帝都校長の椅子の下官公舍へ赤化の潜入人の只管懇願奉ります　恐惶頓首

石城郡大浦村、
芳賀保三郎
百拜

× ×

謂ゆる熊の强威の羽風を怖る雛子の類に此の言の容迷信の霧深き余り、主事閣下の敎ひを垂れ賜ふて迷信の霧深きに迷ひある悟りを開かしめられん事を幾重に

△政治金融機關、官公署二三　郵便局所五　銀行五　會社四二　金融組合二
△貿易、二、六五八、三〇〇〇圓（輸移出五一八、四、〇八四圓　輸移入一五、四七四、二一六圓）

× ×

拜啓　陳者立春の候貴家御多祥奉願上候降而小生儀御蔭樣を以て其後無恙今般は共格別の御懇情を辱ふし深命により肩書の處に着任仕校長を被命候に就ては將來一層の御指導と御眷顧とを賜度奉懇願候　先は不取敢御禮旁々御挨拶申上度如斯御座候　敬具

昭和九年四月一日

岐阜市菅原町二
岐阜中學校官舍
河上和一

× ×

春陽ほど近かき折柄御座右御伺ひ申し上げます

昭和九年四月上旬

朝鮮元山每日新聞社內
北市典詳

二伸　昨年十月元山に移住後は新しき社務に忙殺、改曆早々北鮮の嚴寒に當てられて入院等々のため從來は心無に御無沙汰を重ねまして失禮の段深くお詫び申し上げます

元山大勢

△戶數人口、內地人二、〇八六戶　九、五二三人　朝鮮人九、一二二戶四二、〇六五人　外國一六〇戶七七〇人）合計五二、三五八人
△國防機關、要塞司令部一在鄉軍人分會四會員七〇〇人　國防思想普及會一會員約一、三〇〇人
△敎育機關、幼稚園私立五、二五六人　初等學校公立四私立六四、六六八人　中等學校公立三私立一一、二七八人

恐惶頓首

石城郡大浦村、
芳賀保三郎
百拜

× ×

拜啓　陳者立春の候貴家御多祥奉願上候降而小生儀御蔭樣を以て其後無恙今般は命により肩書の處に着任仕候間乍他事御休神成被下度候實に在平中は公私共一方ならぬ御厚情を蒙り候段有難く厚く御禮申上候　茲に再び黎明の東亞に使して新鐵道建設に參加致す事と相成候に就いては何卒皆樣の有難き御支援に依つて祖國の爲最後の御奉公を完うし仕度偏へに奉願上候又鄕里に留守居の家族に就いては甚乍勝手是亦皆樣の有難き御愛顧を賜はり度伏して奉願上候

先は右御禮申上度且つは此の上共何分宜しく奉願上度如此に御座候乍末筆益御自愛の程奉祈上候　敬具

滿州國哈爾濱鐵道建設事務所（三棵樹驛在勤）
本多麟太郎

祝、磐中開校紀念日

平町鼠坂　小檜山久作
平町南町　酒井國三郎
平町六間門　齋藤榮一
平町紺屋町　青天目源一郎
磐城中學校交誼會
●第一回●
草野村助役　渡邊重彌
好間小學校　宮內喜忠
●第二回●
平町仲間町　佐藤要一郎
平町城山　山崎宣吉
●第三回●
平町新川町　石城郡醫師會副會長　木村寅次郎
平町仲間町　廣田德行
平紺屋町郵便局長　山崎清三
好間字小學校長　吉田庄太郎
●第四回●
夏井村　山名隆貞
平專賣局長　磯上左源太
平町水道課長　箱崎清一
●第六回●
錦村

磐城無盡商會　大平菊次郎
湯本町　芳賀良太
●第七回●
湯本小學校長　篠原保治
入山採炭會社　比佐源造
平長橋町　小野園次郎
平町南町　織田齒科醫院　織田豊太郎
●第八回●
江名小學校長　堀旗弘
平町南町　芹澤豊志
內郷村　第二小學校長　柴田正則
平町三丁目區長　梅原利三郎
●第九回●
平窪村　松吉屋松本金市郎
●第十回●
小名濱町　柳內準平
大久村　根本源壽
平町月見町　根本一馬
養鷄業
江名長崎分教場長　四家健吉
●第十一回●

平町釜屋商店　諸橋久太郎
平町四丁目　マルトモ書店　柴田德二
平町十五丁目　松本榮一
植田町　法學士　綠川秀男
平町五丁目　磐城建物會社長　井上貞治郎
平町八幡小路　成田政助
●第十二回●
平町田町　水質試驗場長　松井深
平町田町　小泉義浩
野崎自動車部　野崎喜八郎
●第十三回●
江名小學校　遠藤菊次郎
平町南町　石城郡醫師會理事　大和田郡司
●第十四回●
大浦村　酒井善吉
豐間村　遠藤勝政
小名濱西町　澄川康哉
平町田町　平鹿民金庫監事　藤田榮助
湯本信用無盡會社長　鈴木康平

平商業學校　中村政
●第十五回●
植田町　小林讓三郎
小名濱町　藤祉商店　高木忠治
平町四丁目　伊勢屋商店　阿部修也
平町南町　上田耕作
●第十六回●
平町新川町　吉田定太郎
平町大工町　志賀齒科醫院長　志賀與市
平町　三猿文庫　諸橋元三郎
平町　關內油店　關內正一
湯本入山採炭株式會社　大越新
湯本町　松柏館　比佐榮一
植田町　森合齒科醫院長　森合芳男
內郷村宮　葉谷秀英
湯本郵便局長　鯨岡潔
湯本町　鯨岡久一郎
●第十七回●
平新川町　諸橋外科醫院長　諸橋鐵彌

平土橋通り　原齒科醫院長　原精一
平町胡麻澤　蛭田利光
平町古鍛冶町　長瀨量平
植田町　前田醫院　前田清美
平町大工町　町會議員　多田井笑次郎
●第十八回●
四倉町　木村醫院長　木村守江
平町大町　松本幸平
內郷村高坂　五十嵐齒科醫院長　五十嵐一也
平町堂ノ前　梅崎安正
●第二十回●
玉川村　村會議員　養政會支部長　齋藤晃
平町五丁目　大竹酒店　大竹久太郎
●第二十一回●
平町田町　石坂代書事務所　石坂一雄
平第二小學校　熊谷元孝
鹿島村小學校　小野海
●第二十二回●
渡邊村

岩下牧場　高木善枝
●第二十三回●
平町仲間町　中柴光泰
平町三丁目　中野勇雄
●第二十四回●
四倉町新町　小林勝人
平町大町　諸橋敬二郎
平町胡麻澤　桐谷文雄
●第二十七回●
植田町　古川酒造店　古川忠助
平町材木町　櫛田忠義
●第二十八回●
平町四丁目　猪狩庄一郎
平商業學校　菅原勉
平町二丁目　仙臺衛戍病院藥室內　鈴木新右工門
平町大館　小林智清
●第二十九回●
平町田町　高久孝
●第三十回●
平町才槌小路　門傳正

內科、小兒科、
藤沼醫院
平町紺屋町　電話五〇七番

磐城セメント代理店
西村屋藥舗
平町二町目（電話長三番）

吸入用酸素
純度99%

度量衡
モノサシ
マス
ハカリ

計量器
体温器
寒暖計

關內藥局
電話四〇番

新製品ヨツト安全剃刀
研器兼用
皮砥付
替刃三枚付
1.00

平町五丁目
久
釜屋商店
電話九番・九九番

平町田町　電話五一三番
高久病院